

# アクティブ・ラーニング支援と 大学図書館に求められる機能

— 西南学院大学新図書館（2017年4月開館）の構想 —

古 田 雅 憲

The Support Strategies for Active Learning and  
the New Functions Required for Academic University Libraries

Masanori Furuta

## 【緒言】

過日、西南学院大学図書館長として「平成28年度 福岡県学校図書館協議会 学校司書部 高等学校司書部会」で講演をさせていただいた。小稿はその主旨を記録したものである\*<sub>1</sub>。

当日は、福岡県下四地区（北九州、筑豊、福岡、筑後）の公私立高等学校で図書館業務を担っていらっしゃる司書の皆様92名の方にご清聴たまわった。

筆者の登壇に先だって2組の方々からご発表があった。一つは「福岡地区これからの学校図書館班」の方々\*<sub>2</sub>から「図書館を使った授業への支援について」と題して、それぞれの方が勤務しておられる学校図書館の取り組みについて。もう一つはお二人の方\*<sub>3</sub>から「第40回全国学校図書館研究大会（神戸大会）」と題して、2016年夏に開催された全国規模の研究大会への参加報告について。

いずれも「学校図書館におけるアクティブ・ラーニング支援」をテーマとするお話であり、また筆者の拙話もそれを含むものだったので、当日お世話くださった方\*<sub>4</sub>の言によれば「昨日は、会長の挨拶から実践発表、全国大会報告、要望書、ご講演まで、ALつながりでした。時代ですね」とのこと——この場

に集われた学校司書の皆さん方が、一般の図書館ならぬ「学校図書館の果たすべき機能」や、司書一般ならぬ「学校司書の担うべき職能」などの事柄について真摯に自覚的に議論を重ねていらっしゃる姿は、「大学図書館」という学校図書館の運営に携わる筆者自身にとって実に良い学びの場となった。このような機会を与えていただいたことに改めて御礼を申し上げる次第である。

なお当日は会場前方にスクリーンを設置し、プレゼンテーションソフトで作成したスライドを投影しながら話を進めさせていただいた。併せて投影スライドから抄粋した資料（A4用紙2枚）と参考文書2種<sup>\*5</sup>を手許資料として配布した。

### 【学校図書館年にあたって】

皆様、こんにちは。ただ今ご紹介にあずかりました西南学院大学の古田雅憲でございます。日頃は人間科学部児童教育学科の教員として、小学校・幼稚園教員や保育士を志す学生君を相手に、日本文学、児童文学、国語科教育法、言語発達論などの講義を行っています。

昨年（2015年）の4月から西南学院大学図書館の館長としてその運営に携わっていますが、今年度に入りましてからは、いよいよ来春（2017年4月）に迫った新館の供用開始に向けて日々、学内外の関係部局との最終的な調整作業等に追われているところです。

本日、福岡県下の高等学校で学校図書館の企画運営を担っていらっしゃる皆様とこうして親しくお話しさせていただく機会を与えられましたことについて、大学図書館という学校図書館の運営に携わっている者の一人として、まず心から御礼の言葉を申し上げます。

これから1時間半ほどのお時間を頂戴して、「アクティブ・ラーニング支援と大学図書館に求められる機能—西南学院大学新図書館の構想」という演題で拙い話をさせていただきます。具体的には来春に開館する私どもの新図書館についてその設計理念や機能をご紹介しますながら、教育活動に対する新しい社会的要請として昨今しきりに取り上げられる「アクティブ・ラーニング」に関して、学校図書館としての本学新図書館がそれをどのように支援しようとしてい

るのか、そのあたりの事柄について、同じく学校図書館に携わっておられる皆様にお聞きいただき、その後、時間の許す範囲で意見交換をさせていただければ有り難く存じます。どうぞよろしくお願いいたします。



ご存じの通り、本年（2016年）は「学校図書館年」とされています。一昨年（2014年）、「学校図書館法」の改正に伴ってようやく「学校司書」が法制化されたわけですが、それを承けて、昨年9月に発足した『学校図書館年』を広める会\*<sub>6</sub>とおっしゃる皆さん方が提起なさったところだそうです。

同会の「設立趣意書」を拝見いたしますと、「我が国では、学校図書館の重要性が認識され、活動が活性化され、さらに諸外国の教育及び学校図書館界においても我が国の学校図書館への関心が高まっている状況に鑑み、2016年を『学校図書館年』に制定したいと考えます。より多くの方々为学校図書館の意義・目的・活動等に対する理解を深め、さらに学校図書館及び学校教育の充実・発展を図るために、『学校図書館年』を普及し、学校・団体・機関等との連携を図り、下記の活動を積極的に展開する所存です」とのこと。まことに結構なことと存じます\*<sub>7</sub>。

そのような「節目」とも言うべき年にあたって、この夏、学校図書館をテーマとする大きな研究会が二つ開催されました。

その一つが8月22日から5日間、明治大学駿河台キャンパスで催された「第45回 国際学校図書館協会世界大会」です。国際学校図書館協会（IASL）国際大会の国内開催は初めてのことだそうです。期間中30カ国から300名以上の参加者があって「デジタル時代の学校図書館」との大会テーマに沿って充実した議論が行われた由です。

もう一つは8月8日から3日間、神戸学院大学ほかで催された「第40回 全国学校図書館研究大会神戸大会」です。この研究大会では「アクティブ・ラーニングを支える学校図書館のありかた」について多様な議論が行われた由ですが、その詳細は先ほど「福岡地区これからの学校図書館班」の方々のご報告くださった通りです。

これらのことを考え合わせると、この夏、私たち学校図書館に携わる人間に

求められたことは、あるいは私たち自身が主体的に考えようとしたことは、「デジタル化」といい「アクティブ・ラーニング支援」といい、すなわち「新しい教育理念や方法論の進展」に伴って生じてきた課題に関して、「これからの〈学校図書館〉および〈学校司書〉は、どのように変わっていかなければならないか」というテーマであったと思います。それをもっとポジティブに捉えるならば、「〈学校図書館〉および〈学校司書〉が有する〈教育力〉に対する期待に、私たちはどのように応えていかなければならないか」というテーマだと言っても良さそうです。

### 【源氏物語を読む授業①〈見る・話す・聞く・考える〉】

このようなアクティブ・ラーニングへの広汎な期待や社会的要請を踏まえて、大学の講義もまた昨今ずいぶん様変わりを迫られています。

私自身が担当する講義中の一コマを具体例としてお話いたします。

私は担当科目の中で「日本の古典文学作品」を取り扱うことができますが、皆様は、例えば「源氏物語を読む授業」という題目からどのような講義を想像なさるでしょうか。

一つには「変体仮名で記された『桐壺』や『若紫』などの薄手冊子本を手にした学生君たちが、もちろん事前にしっかりと予習した上で講義に臨み、ご担当の先生から詳しい解説を拝聴する」といったような教室の光景でしょうか？

私自身はかつて国文学科の学生でしたが、専門科目として学んだことは「訓詁注釈」の方法でした——変体仮名で書かれた「源氏本文」を自ら翻刻し、「古辞書」の類を参観しつつ「源氏諸本」と対校して「読み」を確定するのが最初の作業です。その上で「源氏古注」類や現代の注釈書等を参観しながら自分なりの「注釈」を作成し、その中で自ら「課題」を見出していくのが次の段階でしょうか。そしてその「課題」の解決のために、先学の研究書や論文等を紐解き、あるいは自ら「用例」を尋ねてゆく——これが私の学んだ「源氏物語を読む授業」です。

誤解があっては困るのですが、私は「このような訓詁注釈型の学びはもはや無用である」などと言いたいわけではありません。無用どころか、この学びは自

ら対象に働きかけ、自ら課題を発見し解決しようとするもので、その点では実に「主体的・能動的な質」を備えています。これも立派な「アクティブ・ラーニング」と言って良いでしょう。

ただし私が思い出すその「学びの場」は、しんと静まりかえった国文学研究室の光景です。学生たちはそれぞれ「読む」活動に集中し、それぞれ無言で課題について「考える」のでした。その様子を「個人的な学びの場」での活動と呼んでも良いでしょう。相互的な話し合いの場が持たれるとしても、それは個々の学びがある程度以上に確立した後のこと、言わば相互的な「話す・聞く」活動に基づく「協働的な学びの場」はやはり付随的位置に止まった、少なくとも「主」ではなかったと思います。

私の経験した「学びの場」は確かに「主体的・能動的」なものではありませんでしたが、あくまでも「個人的」なものであって、そこに「協働的」な要素は希薄だったと振り返ることができそうです。そしてこの「協働性」こそ、昨今しきりに言われる「アクティブ・ラーニング」においては、もっとも重視される一点であるに違いないのです。

ちなみに現行の国語教育（学習指導要領）では、学習の領域構成について「（1）話すこと・聞くこと（2）書くこと（3）読むこと」のように掲げています。もちろん「1-2-3」の項目立ては必ずしも「優先順位」という意味ではありませんが、そのような順に掲げられていること自体、今日の国語教育においてはやはり「話す・聞く」言語活動にかかる学習が重視されていることの現れと見て良いでしょう。そこで言う「アクティブ・ラーニング」の具体的な展開イメージも、やはり「話す・聞く・考える」の言語活動に基づく「協働的な学習場面」を念頭に置いているのだと思います。



そのように申しますと、皆様は「それでは大学の講義等の中で、その『協働的な学習場面』とやらは、いったいどのように実践されているのか」とお感じになることと思います。

ここで、私自身が児童教育学科の学生君たちを相手に行っている「源氏物語を読む授業」をごらんいただきたいと思います。

最初にその「学習テーマ」について確認させてください。私の目の前にいる児童教育学科の学生君たちには、私がかつて学んだような「訓詁注釈」は必要ありません。と言うのも、小学校や幼稚園の先生を志す彼等に求められていることは、子どもたちの学習場面をしっかりと支えるための技能と知見であって、古典文学それ自体を読み深めていくためのそれではないからです。

その「子どもたちの学習場面」について「学習指導要領」は、「子どもたちが古文や漢文の音読を通じて、昔の人のものの見方・感じ方など内容の大体を知り、また日本語のいろいろなリズム感や語調の美しさ・楽しさを体感すること」が大切であるというようなことを掲げています。

つまり私の目の前にいる学生君たちに必要なことは、まず「源氏物語の音読を通じて、紫式部や光源氏をはじめとする登場人物たちのものの見方・感じ方や物語内容の大体を知り、また源氏本文のリズム感や語調の美しさ・楽しさを体感すること」であり、さらに「音読を通じて古文や漢文に親しむ授業作りの方法論を体得すること」であるはずです。

そのようなわけで、これからごらんいただく「源氏物語を読む授業」は、「音読を通じて源氏物語の内容や登場人物のものの見方・感じ方を知り、日本語のリズム感や語調の美しさ・楽しさを体感すること」を「学習テーマ・学習のねらい」として設定しています。

そのようなテーマを達成するために資料として今取り上げようとするのは、国宝「源氏物語絵巻（徳川美術館蔵）」の中の「蓬生」と呼ばれる章段の絵と言葉です\*8。



(会場スクリーンに下掲の文章を投影しながら) この講義に用いるのは「蓬生」章段のうち前半部分にあたる本文です。

卯月ばかりに、花散里を思し出でたまひて、忍びて出でたまふ。日ごろ降りつる名残の雨すこしそそぎて、艶あるほどの夕月夜に、道のほど、よろづのこと思し出でておはするに、形もなく荒れたる家の、木立しげきを過ぎたまふ。

大きな松に藤の咲きかかりて、月影になよびたるに、柳もいたくしだりて、築地も触はられねば、乱れ伏したり。

「見し心地するかな」と思すは、はや、この宮なりけり。例の惟光はかかる御忍びありきに後れねばさぶらひけり。入れて尋ねさせたまへば、めぐるめぐる入りて、人の音する方やと見るに、月明るさし入りたるに見れば、格子二間ばかり上げて、簾動くけしきなり。わづかに見つけたる心地、恐ろしくさへおほゆれど、寄りて声づくれば、いともの古りたる声にて、まづしはぶきを先にたてて、「かれは何人ぞ」と言ふ声、いたうねびすぎにたれど、聞きし老人と聞き知りになり。（後略）

もちろん本物は変体仮名で書かれていますが、大学での講義に用いる都合、現代の活字に翻刻し、必要に応じて句読点・カギ括弧等を施した漢字仮名交じり文に改めています。



【図版①；徳川美術館・五島美術館監修（2005）『よみがえる源氏物語絵巻』（NHK 名古屋放送局ほか）p.10-11 より引用】

皆様にはこうして最初にお目にかきましたが、実は学生君たちは、この本文を一番最後に目にするようになります。学生君たちが最初に見るのは「蓬生」章段の絵の方で、まずはそれを「絵解き」して見せるところから学習が始まるのです。その学習の第一段階を「絵解きを聞く・周囲の人と意見交換する」と称しておきます。

これからその学習時に私が行う「絵解き」を再現してみますので、皆様もしばらくの間は児童教育学科の学生になったおつもりでお聞きいただき、時に私が発する質問について考えてみてください。

ただし本日は時間の都合もあり、実際の講義では途中から用いる「平成復元摸写」の図版<sup>※9</sup>を最初から用いて話をさせていただきます（図版①）。

### ■学習の第一段階：絵解きを聞く・周りの人と意見交換する

（会場スクリーンに「国宝絵巻」の「蓬生」図を投影しながら）この絵は徳川美術館が所蔵する国宝「源氏物語絵巻」の中の一画面で、「蓬生」と呼ばれている章段です。およそ今から850年ほど前に描かれました。ずいぶん傷んでいますね。

（会場スクリーンに「平成復元摸写」の「蓬生」図を投影しながら）さて、こちらはいかがですか。豊かな色彩が画面にうち満ちる美しさと言ったら、皆様のため息があちらこちらから聞こえてくるほどです。

近年、先ほどお見せした「国宝絵巻」の復元摸写が大規模に行われました。最新の科学分析によって本来の顔料やこれまで知られなかった図様が把握され、その成果を踏まえて熟練の現代日本画家たちが、成立当初の「源氏物語絵巻」を再現したのです。今日はこの絵を深読みしながら、この「蓬生」と呼ばれる一画面を鑑賞してみたいと思います。



まず画面左方に描かれている二人の人物に注目してみましょう。

#### ①身に着けているものの違いが分かりますか？

——周囲の人と相談して良いですよ。（会場のつぶやきを拾いながら）そうですね、それぞれの被っている「帽子」が違いますね。左側の人物が被る帽子はスッと立っていますが、もう一人のは峰の部分がやや折れたように描かれています。それぞれ<立烏帽子>、<折烏帽子>と言われる被り物です。

そもそも左側の人物には<傘>が差し掛けられていますから、左側が<貴人>、右側はその<従者>だと想像できますね。実は被り物の描き分



けも二人の関係性を示唆するサインなのです。もうお分かりかもしれませんが、「源氏物語」で〈貴人〉と〈従者〉となれば、主人公の〈光源氏〉とその忠実な従者〈惟光〉のお二人ですね。



②それぞれの衣服についてはいかがですか？

——（会場のつぶやきを拾いながら）そうですね、〈惟光〉の着物は肩の部分が開いていますが〈光源氏〉のは開いてない。

〈惟光〉の着物は〈狩衣〉と呼ばれるもので、〈光源氏〉が着ている〈直衣〉に比べ、両手の自由が利きやすく動きやすい服装です。〈惟光〉は甲斐々々しく〈光源氏〉のお世話をしているといった体なのでしょう。

細かいことを申しますと、〈光源氏〉は〈花襷文〉を織り出した直衣〉の下に〈亀甲繫ぎ文の指貫〉を着けています。上下とも〈二藍〉の染め物です。また〈指貫〉の下から〈緋の下袴〉が透かし見えているので、〈光源氏〉の着物は薄く織りなした〈夏直衣〉であることがわかります。つまりこの場面は〈夏の頃合い〉というわけです。

ちなみに〈惟光〉は〈白の単衣〉に〈二藍の指貫〉を着け、その上から〈唐草文〉を散らした〈萌葱の狩衣〉を着ています。その紺色と緑色の組み合わせによる色彩構成は、〈光源氏〉の衣装の彩りとも相俟って、また差し掛けられた〈傘〉の、その上方に描き添えられた〈松の葉〉と〈藤の花房〉の彩りとも響き合っています。それらが一体となって描かれたこの一瞬に満ちている「清涼な空気感」を見事に表している、と言えそうです。



③〈惟光〉が何をしているか分かりますか？

——周囲の人と相談して良いですよ。（会場のつぶやきを拾いながら）そうですね、〈惟光〉はやや腰を屈めながら、右手に持った〈棒のような物〉で「何かを探ったり払ったり」している様子ですね。ちなみにその〈棒のような物〉は〈馬鞭〉だと思われます。画面に描かれていませんが、〈光源氏〉は馬に乗って来たのでしょう。〈惟光〉はその〈馬鞭〉で主人の乗る馬を追っていたのです。今その〈鞭〉で彼は何をしているのでしょうか。

④ なぜ<光源氏>に<傘>が差し掛けられているのだと思いますか？

——（会場のつぶやきを拾いながら）そうですね、<雨>が降っているということですね。今現在はどうかと言えば、たぶんもう降ってはいない——と言うのも<惟光>の方は、もう<雨>を気にしている様子がないですから。つまり<松ヶ枝>から先ほどまでの<雨の雫>が零れてくるので、<別の従者>が<光源氏>に<傘>を差し掛けていたのです。

と言うことは<惟光>は<光源氏>の先に立って、辺り一面に生い繁っている<蓬><かたばみ><露草>などの葉に置いたく雫を払っていたのだと分かるでしょう。今日でも大相撲で横綱が土俵入りする際、<露払い>の力士が横綱の先に立って入場しています、そう、あれですね。

この場面、つい今し方まで雨が降っていた<蓬>などの生い繁る草はら>を、<光源氏>と<惟光>は足下の悪いのを気にしつつも、<そこ>へ向かって歩を進めているのです。よくは見えませんが<光源氏>は袴の<股立ち>を取っているらしく、たぶん裾をつまみ上げて濡れないようにしているのだと思われます。

⑤ <光源氏>が向かっている先には何が見えますか？

——（会場のつぶやきを拾いながら）そうですね、<光源氏>の向かう先には<廢屋>があります。<簀子縁>もひどく毀れ落ちていますが、室内には<女性>が居て何かしている様子です。手に何か持っていますが、何をしているのか定かではありません。と言うのも、全体もう人の住めないような有様ですが、それでも<簾>ばかりがそれらしく下ろしてあるからです。かつては立派なたたずまいを見せた邸宅で、そこに住まうのもまた気品に満ちた人たちだったということでしょう。この<女性>は邸宅に仕えた<侍女の一人>ということのようです。

もっともその<簾>ときたらボロボロのヨレヨレで、もはや人目を忍ぶ役目も叶うまいと思われほどですが。その<女性>にしても髪はひどく乱れていて、いつからお手入れをしなくなっていたのかと思われるほどです。

つまり、どのような事情があったかは知りませんが、今や家財の修繕もままならぬほど困難な家計の中、女たちは息を潜めるように過ごしていたのです。〈光源氏〉はこの邸の奥深くに住まう〈あの女〉に逢わなくてはならなかった——その理由は描かれたところからは分かりません。



⑥〈傘〉上面の縁部分が白く見えますが、それはなぜだと思いますか？

——（会場のつばやきを拾いながら）そう、よくお気づきになりました。これは〈月の光〉が反射しているからですね。うっすらと名残の雨滴に濡れた傘表が月の光を浴びて輝いている、そのキラキラした感じを銀砂という顔料を散らして表現しているわけです。

また画面左上方から右方にかけて見てください。〈光源氏〉のいる方がキラキラと白く光り、〈廢屋〉に近づくにつれて暗くなるように見えます。これも銀砂がグラデーションで施されているからです。

この絵を描いた画家は銀砂をこのように使うことで、〈月〉が画面左方から庭先に差し込んで辺りを照らしていることを表現しているようです。つまり〈光源氏〉に差し掛けられた〈傘〉や彼の足下は〈月の光〉を浴びてキラキラと輝き、その一方で〈廢屋〉は光も届かず暗い闇に沈んでいる——まさに〈光源氏〉と〈闇の中に居るあの女〉の、光と闇のように対照的な境涯が、この銀砂の使い方からも鮮やかに感じ取られるというわけです。

よく見ると、〈蓬葉〉〈かたばみ〉〈露草〉などの〈草の葉〉も、緑青と白緑青とで微妙に塗り分けられています——〈草の葉〉に置く〈白露〉が風に揺られ揺られてキラキラと光る様子が目に浮かびます。それはあたかも白銀の細工が風に揺られているかのようで、時々その薄い白銀細工が触れ合って、微かな音さえ聞こえてくるようでもあります。

もちろんこの絵から知ることはできませんが、その〈闇の中にいるあの女〉の名は〈末摘花〉。かつて源氏と契りを結び、その再訪をひたすら信じて待ち続けるうちに零落し、いつしか世間からも忘れ去られつつある女性でした。

私の「源氏物語を読む授業」はこのような「絵解き」から始まりますが、そ

のなかで学生君たちがどのような学習活動を行うことになるのか、実際にそれを追体験してくださった皆様にはご理解いただけると思います。(会場スクリーンに下掲図を投影しながら) それはたぶん次のような連続的な学習活動です。

- 1) 絵をゆっくり見る。
- 2) 教員の「絵解き」を聞く。
- 3) 自分なりに考える。
- 4) 自分の考えを周囲の人に話す。
- 5) 周囲の人の考えを聞く。
- 6) 再び絵を見て、また考える… (以後、繰り返し)。

要するに私の講義は、その第一段階で「見る・話す・聞く・考える」という学習活動を反復的に活性化することを通じて「協働的な学びの場」を作り、それを以て「対象に関する認知」を学習者相互の交流によって深めようとするものなのです。

ちなみに美術館や博物館には、「絵を見て考える、自分の考えたことや感じたことを話す、お互いの言葉を聞き合う、再び絵を見て考える」という活動を反復的に行うことで鑑賞者の理解・表現を向上させようとする鑑賞教育の方法論があります。これを「ビジュアル・シンキング (Visual Thinking)」などと称することがありますが、実は私の「源氏物語を読む授業」はその応用ということでもあります。

### 【源氏物語を読む授業②<書く・語る・聞く・考える>】

ここから私の「源氏物語を読む授業」は次の段階に進みます。ここでは先ほどの「絵解き」を踏まえて、「この絵がどのような物語場面を絵画化したものか、この絵の向こう側にどのようなストーリーがあるのか」ということについて、それぞれが想像したところを文章として書いてみる、そして、そのストーリーを周囲の人と朗読し合い聞き合ってみる、そのような学習を行います。この第二段階を「ストーリーを想像して書く・周囲の人と朗読して聞き合う」と称しておきます。

さて皆様は、先ほど私が「絵解き」をした絵の向こう側に、いったいどのようなストーリーがあると想像なさるでしょうか。もし今、それを原稿用紙1-2枚で書いてくださいなどとお願ひしたとしたら、どのような物語を書いてくださるでしょう？

(会場スクリーンに下掲図を投影しながら) 今日には時間の都合もありますので、過日、ある学生君が書いたストーリーをご紹介します。もちろん私が必要に応じて文言の加除を行って整理したものです。

■学習の第二段階：ストーリーを想像して書く  
：周囲の人と朗読して聞き合う

「源氏物語 蓬生」

夏の初めのある晩のこと。

源氏はとある荒れ果てたお屋敷に迷い込む。

かつては美しく造り成していたであろうお庭も、今や整える人もお金もないらしく、一面に蓬やかたばみなどの草が生い茂っている。ただ傍らに植えられている松の立派な枝振りばかり、かつての面影を留めているのだろう。もっともそれとても藤蔓にはや絡みつかれているけれども、季節らしく咲き誇る花房がせめてもの華やぎである。

つい今し方まで降っていた小雨の名残で、松ヶ枝から一しづく二しづく零れてくる。従者があわてて傘を源氏に差し掛けた。一面の蓬もしつとりと濡れそぼって、惟光がしきりにその露を払う。後ろに続く源氏も足下を気にするふうである。

折しも月が昇ったと見えて、澄んだ光があたりに満ちみちる。蓬が原一面に降り敷いた滴が白銀の細工のように輝き出す。時折ふっと吹く風にゆらゆらと揺られて秘やかな音さえ聞こえてきそうだ。

その月明かりの届かぬ闇の向こうに、今や毀れ果てたお屋敷の一室がぼうっと浮かび上がる。目をこらせば、何びとか身支度も行き届かない女性が今も住みなしているようだ。源氏はなぜか「あの人に会わねば」と思い定めているらしく、そこに向かって静かに歩みを進めている。

いかがでしょうか。文中、下線を施した部分は「絵解き」から知り得た情報ですが、それをだいたいすべて上手に組み合わせつつ、なかなか良い文章が書けていると思います。このような文章をそれぞれに書いてみるわけです。



ここで大切なことがあります。それは、それぞれが書いた文章を互いに読み合う活動を取り入れることです。もちろん黙読し合うことよりも、朗読して聞き合う方が良いでしょう。と言うのも「その文章を声に出して読む」活動には、「その文章についての理解を隅々まで行き届かせる」という効果があるからです。

例えば「A君は二階のベランダにいたB君に『おーい』と声をかけた」という一文を想像してみてください。文字にすればただの「おーい」ですが、実際に声に出そうとすると、「二階のベランダにいる人に下から声をかける『おーい』」とはどのような「声」なのか、それは「二階のベランダから下に行く人に声をかける『おーい』」とはどう違うのか——そのようなことについて意識を向けざるを得なくなります。そしてそれを契機として、「A君とB君は旧知の間柄なのか、知り合ったばかりか」とか、「A君とB君は同級生なのか、もしかすると先輩・後輩の間柄だったのではないか」などのように、「おーい」と声を出すにあたって解決しておかなければならない状況設定があれこれと存在することに気付くことでしょう。「読み深める」とはそういうことなのです。つまり「声に出す」ことが、その一文をより具体的に深く理解するための契機になるのです。「音読」は低学年児童のためだけにあるわけではありませんね、もちろん皆様には言わずもがなのことだと思います。

さて試みに、先ほどの某君が書いてくれたストーリーを朗読してみますので、皆様、どうぞお聞きください。(会場スクリーンに改めて「蓬生」図を投影する。今度は効果音やBGMを埋め込んで作成したもの。)

——いかがですか、私の拙い朗読でしたが効果音やBGMの効果もあって、この「蓬生」図の向こう側にあるストーリーを、これまで以上に明瞭に感じ取っていただけたのではないのでしょうか。それは、皆様が心の中で想像していたら違ったことと似ていたでしょうか？ あるいは違っていたとすれば、ど

のようところが違っていましたか？

このようにして、それぞれの書いた文章を朗読し合い聞き合うことによって、互いの読み方の違いや感じ方の違いなどがより具体的に浮かび上がります。他者の読み方や感じ方を知るなかで、自分自身の読み方や感じ方の良さや個性といったものにもまた具体的に気付くことができるわけです。このようにして、一場面の様子や登場人物たち及び語り手の思いなどと言った「文章の襞」のようなものが、この学習の場に立ち上がってくるのです。「協働的な学びの場で、源氏物語の読みが深まる」とは、こういうことを言うのだろうと私は思っています。

### 【源氏物語を読む授業③<読む・考える>】

こうして私の「源氏物語を読む授業」は最後の学習段階に進みます。この第三段階を「教員による原文の朗読を聞く・周囲の人と朗読して聞き合う」と称しておきます。

ここまで来れば、たとえ「古典文法や単語や文学史の暗記に辟易した、古文はつまらない」と公言するような学生君でももう大丈夫です。難解な「源氏物語」でも、詳しい解説をしてもらわなくても、原文に直にぶつかってスツと読み取れるでしょうし、「古文の音の響きやリズムを味わう」余裕さえも持ち合わせていることでしょう。それは「絵解き」を聞き、自分なりの物語を想像（創造）して書き、周囲の人と朗読し合う活動を通して、学生君一人ひとりの身体と意識の中にストーリーの概要がしっかりと根付いたからです。

冒頭にお目につけた「源氏物語絵巻 蓬生」原文を朗読してみますので、皆様、どうぞお聞きください。（会場スクリーンにまた「蓬生」図を投影する。これも効果音やBGMを埋め込んで作成したもの。）

■学習の第三段階：教員による原文の朗読を聞く  
：周囲の人と朗読して聞き合う

卯月（と言いますから、旧暦4月、初夏の頃合いですね）、（その）卯月ばかりに、花散里（と呼ばれている方は源氏の通い人の一人ですが）、（そ

の)花散里(様のこと)を思し出でたまひて、忍びて出でたまふ。

日ごろ降りつる名残の雨すこしそそぎて、艶ある(と言うのは、いつも以上にしっとりと優美に見えるという意味ですが)、艶あるほどの夕月夜に、道のほど、よろづのこと思し出でておはするに、(元の)形もなく荒れたる家の、木立しげき(と言うのは、木立が鬱蒼と茂っている辺りと言う意味ですが)、(そういう場所)を過ぎたまふ。

(ふと見れば)大きな松に藤の咲きかかりて、(その花房が)月影になよびたるに(と言うのは、月明かりの中でたっぷりとしなやかに揺れている様子です)、柳もいたくしだりて、築地も触はられねば、乱れ伏したり。

(その時、源氏は)「(ああ、ここは何時だったか)見し心地するかな」と思すは、はや、この宮なりけり(あの人の邸宅だと思い出したわけです)。

例の惟光はかかる御忍びありきに後れねばさぶらひけり。(源氏は惟光を中に入れて尋ねさせたまへば、(惟光は)めぐるめぐる入りて、人の音する方やと見るに、月明くさし入りたるに見れば、格子二間ばかり上げて、簾動くけしきなり。わづかに見つけたる心地、恐ろしくさへおぼゆれど、寄りて声づくれば、いともの古りたる声にて、まづしはぶき(と言うのは咳払いのことですね)、(中にいる女が咳払い)を先にたてて、「かれは何人ぞ」と言ふ声、いたうねびすぎにたれど(「ねぶ」と言うのは、すっかり年を取った様子で、と言う意味ですが)、聞きし老人と聞き知りけり。(惟光もこの老女が誰だったか思い出したということですね。)

(後略)

今、「蓬生」原文をほぼそのまま朗読したのですが、いかがですか？ 私は必要最小限の言葉を補っただけに過ぎませんが、皆様は実にたやすく「源氏物語」を読むことができたのではありませんか？ ここで言う「読めた」とは、「古い日本語の響きやリズムを楽しみながら、その場面の様子や登場人物の心境を捉えることができた」ということですね。もしそれが達成できていたとしたら、冒頭で申しました「学習のねらい」、すなわち「音読を通じて源氏物語の内容や登場人物のもの見方・感じ方を知り、日本語のリズム感や語調の美し



さ・楽しさを体感すること」というテーマが無事に達成できたということになるわけです。

ぜひ今日ご自宅にお帰りになってから、この「蓬生」原文をそのまま朗読してみてください、きっと気持ちよく朗読できますから。どうぞお試しください。



「アクティブ・ラーニング」を意識して行う「源氏物語を読む授業」とは、およそこのような仕組みになっています。(会場スクリーンに下掲図を投影しながら) ここでいったん整理してみましょう。

	学 習 内 容	学習活動の領域	場
第一段階	a) 提示された絵図等を見ながら教員の「絵解き」を聞き取る。	見る 聞く (メモを取る) 考える	教室
	b) 見たこと・聞いたことを踏まえ、自分の考えや感じ方について、周囲の人と話したり聞いたりする。	話す 聞く (メモを取る) 考える	
第二段階	c) 参考資料を読みながら、自分が考えたり感じたりしたことをストーリーとして文章化し、また必要に応じて発表用の資料やプレゼンテーション用スライドを作る。	読む 考える 書く ICT 機器を使う	図書館 または 自宅等
	d) 自分の書いたストーリーが周囲の人に向けて上手に朗読発表できるように練習する。	語る 演じる ICT 機器を使う	
	e) 実際に周囲の人と向き合ってお互いが書いてきたストーリーを朗読して聞き合う。	語る 演じる 聞く (メモを取る) 考える	教室
	f) お互いの朗読発表を聞き合いながら、今まで気付いていなかったことに気付く。また同時に相手の良いところや自分の個性等について改めて気付く。	語る 演じる 聞く (メモを取る) 考える	
第三段階	g) 教員による原文の朗読を聞く。	聞く (メモを取る) 考える	教室
	h) 周囲の人と原文を朗読して聞き合い、古い日本語の響きやリズムを楽しみながら、その場面の様子や登場人物の心境を捉えることができる。	語る 演じる 聞く (メモを取る) 考える	

このような学習の流れの中で、「主体的・能動的・協働的な学習活動」としてのアクティブ・ラーニングが活性化しているわけです。そしてこのような学習活動を含む講義が成り立つためには、上の表で言えば「学習の第二段階」中の、「図書館（あるいは自室）」を「学習の場」として行われる「学習内容 c) と d)」が豊かなものであることが必須となります。またさらにそのためには、学生たちが日常的に「ICT 機器を使」いながら「資料を読み、自分なりに考えを深めて文章として書く」活動に慣れ親しんだり、お互いに「考えたことや書いたものを声に出して語ったり、演じてみたりする」体験を交換し合ったりできる場が不可欠になるでしょう。

来春（2017年4月）開館いたします本学の新図書館は、従前の図書館機能をさらに充実させるとともに、このような「主体的・能動的・協働的な学習」——すなわち「アクティブ・ラーニング」の実践に資する機能を併せ持つべく設計されました。その機能を持つ空間のことを私たちは「ラーニング・コモンズ」と呼び、そこに常駐して利用者の学習活動を支援するスタッフのことを「学修相談員（ラーニング・コモンズ・コンシェルジュ）」と称しています。

### 【本学新図書館の機能】

本学新図書館は、西南学院大学西新キャンパスの南東角に建設された地上7階建て・延べ床面積11,715㎡の建物で、その外観はくレンガ・トレスアリーと呼ばれる赤レンガの透かし積みと全面がガラスとを



【図版②；外観】

組み合わせられて創られたものです。まさしく「大学の顔・シンボルとなる新たなランドマーク」と言うに相応しいたたずまいを備えています（図版②）。

延べ床面積は現用館（10.643 m<sup>2</sup>、2017年3月末で閉館）とほとんど同じ広さですが、閲覧席数は約1170席（学習室等を含めると約1660席）となり、現用館（約880席）よりも大幅に増やしました。

昨年度（2015年度）実績では、奉仕対象数約9,200人（学生・大学院生及び教職員等）について年間入館者数はおよそ43万人、開館日数（334日）で割れば一日あたりの入館者数は1275人でした。入館者の平均滞在時間が1.5～2.5時間であったことからすれば、現用館でも不都合はありませんでしたが、さらに席数増となる新図書館ではもっと余裕ある運用が可能になります。

実は建築設計に先立って実施した「利用者アンケート調査」で「現用館への不満」を問うた一項目がありました。（会場スクリーンに下掲図を提示しながら）その結果、次のような問題点が浮かび上がりました。

Q.) 図書館の使い勝手について何か不満はありませんか？

- (1) 飲食ができない……227人
- (2) 席が足りない……169人
- (3) ゆっくりくつろげるスペースがない……112人

【調査結果を承けた検討事項】

飲食スペースの確保、席数の増加、リラックススペースの設置などを行い、利用者の長時間滞在に応えられるようなために「滞在型の図書館」を目指す必要がある。

新図書館では1F出入口前に学外一般の方にもご利用いただける「ライブラリー・カフェ」を併設し（図版③）、また館内各階に飲食自由の「休憩スペース」を設けました。それらは「滞在型」というキーワードを具現化する試みです。その他にも「1～2人用・DVD視聴ブース（3F）」（図版④）や照明をやや落とし目に設定する「ブラウジング・ルーム（1F）」（図版⑤）、また館内各所に設置するアート作品等は、すべて利用者が居心地良く時を過ごすための仕掛けです。



そのほかにも現用館にない新機能を帯びる空間等は設けておりますが、やはり「ラーニング・commons」を館内に併置するとした設計こそが最大最新の工夫と言えるでしょう。

本学新図書館は当初の計画決定から5年を経ておりますが、この間、新図書館のコンセプトや設計に係る企画立案を担った建設委員会では、プロジェクトの開始直後から「これからの大学図書館のありよう」について真摯な議論を重ねて参りました。

その中で「従前の図書館機能をさらに充実させるとともに、近年の教育課題であるアクティブ・ラーニングの実践に資すること」という基本理念が取りまとめられ、それが「静けさと賑わいの共存」という、この図



【図版③；ライブラリィ・カフェ】



【図版④；DVD視聴ブース】

書館に特徴的な空間設計<ゾーニング>として実現しました——高層階<サイレント・ゾーン>は個々人の「読む・調べる・考える」活動の場として静謐を保ちつつ、低層階<アクティブ・ゾーン>は利用者相互の「話す・聞く・考える」活動の場として積極的な交流を促す——これからの大学図書館に求められ

る「情報発信と交流のための知的拠点」を具現化する試みです。現用館は主に「読む・調べる・考える・書く」活動の場でしたから全館私語禁止とされていました。が、新図書館では「聞く・見る・話す」活動も大切な



【図版⑤；ブラウジング・ルーム】

学習と位置づけ、1～3階の低層階<アクティブ・ゾーン>では利用者がそれぞれ発言し、学びの交流ができる場を設けています。

その最たる仕掛けが「プレゼンテーション・エリア(1F)」(図版⑥)です。

ここはグループや個人の発表やセミナー、小講演など「話す・聞く・演じる・見る」学習活動を展開することができるオープンスペ



【図版⑥；プレゼンテーション・エリア】

スです。ステージに向けて階段式座席(50人程度)が設けられており、ステージには専用PC・80インチ電子黒板1台を用意しています。それらの機材を活用しながらゼミの発表会や読み聞かせの練習会、セミナーなどが開催できます。

間仕切りを設けないオープンスペースですので、通りすがりの館内利用者でも、たまたま聞こえてきたり見えたりした発表等が気になりさえすれば、その

興味の趣くままに参加することもできます。従来空間（教室等）での発表等は、どうしても特定のグループやゼミ内に「閉じられた知的活動」になりがちですが、その「知」が自ずから解き放たれるわけです。「偶然の



【図版⑦】；ディスカッション・エリア】

知的交流が生じる」と言っても良いでしょう。特定の学部・学科に属して日頃は自ずから「一定の方向性や枠組み」を帯びる学生君たちではあっても、このようなオープンスペースで互いに会うことにより、相互的な「知の攪拌」も期待できるか知れません。

また同じく1階にある「ディスカッション・エリア（54席程度）」（図版⑦）ではグループ討議に参加している人はもちろん、通りすがりの人が話の輪に加わることも可能です。このように開かれた交流空間があることが新図書館の魅力の一つだといえるでしょう。



2階には10室のグループ学習室があります（図版⑧）。利用人数に応じて「大（30人用・2室）・中（15人用・4室）・小（8人用・4室）」の三種類の部屋を用意しています。

「大」の二室には80インチ電子黒板各一台ずつ、「中」の4室には65インチ電子黒板各一台ずつを予め設置するとともに、別に貸出用のノートPC（50台）・タブレット端末（35台）・プロジェクター（2台）・書画カメラ（2台）・ブルーレイプレーヤー（2台）を準備しています。さまざまなICT機材を活用しながら、ゼミやクラブ・部活動活動等の仲間たちとく話し合い・聞き合いの学びを深めることができます。

また2階には学修相談員<コンシェルジュ>が常駐する「ラーニング・サポート・デスク」を設けました(図版⑨)。そのデスク前に広がるスペース(この空間のことを特に「ラーニング・commons」と称しています, 図版⑩)には, 円卓(10人用×8台)と80インチ電子黒板(1台), 65インチ型電子黒板(2台)を設置し, 併せてノートPC(50台), タブレット端末(30台), 短焦点プロジェクター等を準備して, 利用者の求めに応じて貸出せるようにしています。

ラーニング・commonsでは, 円卓を囲んで自由に討論をしたり, お互いの文章を音読しながら添削し合ったり, ICT機器を活用しながらプレゼンテーション用の原稿を確認し合ったりといったような, 利用者がそれぞれの「声」を用いた協働的な学びを伸びやかに繰り広げることができます。そして必要に応じて学修相談員(ラーニング・commons・コンシェルジュ)が利用者の様々な学習相談に応じてゆきます。情報の探し方, レポートの書き方, プレゼンテーショ



【図版⑧; グループ学習室(中)】



【図版⑨; ラーニング・サポート・デスク】

ンの方法など心強いアドバイスが受けられる場所です。

もちろん4~6階の上層階<サイレント・ゾーン>には現用館と同様に静かな空間があります(図版⑩)。静けさのなか一人集中して「読む・調べる・考える」活動を希望する人にとっても、満足していただける環境を保持しています。



【図版⑩；ラーニング・commons全景】



【図版⑪；サイレント・ゾーン，キャレル周り】



さて最後に——ここからは将来的な話になるのかも知れませんが、それは「学修相談員(コンシェルジュ)」の技能や見識をどのようにして保障していくかという課題です。(会場スクリーンに下掲図を提示しながら)当初、私たちは次のような「学修相談員(コンシェルジュ)像」を構想していました。



利用者の具体的なニーズの例	学修相談員の提供するサービス	
※もっと上手な話し合いができるようになりたい。	※利用者の目的や人数等に応じた効果的で適切な討論方法についてアドバイスをを行う。	オラリティ・サポート
※ビブリオバトルに出るので、効果的なプレゼンテーションの方法を教えてください。	※利用者の目的や場面等に応じたプレゼンテーション技術についてアドバイスをを行う。	オラリティ・サポート
※データベースを活用して勝てるデータベースの戦術を教えてください。	※利用者の目的や内容に応じたデータベース等の情報検索方法についてアドバイスをを行う。	ICTサポート
※タブレットとインタラクティブボードを活用して視覚的な討論を体験してみたい。	※利用者の目的や習熟度に応じて情報端末機器の効果的な取り扱い方についてアドバイスをを行う。 ※利用者の目的や習熟度に応じてソフトウェアの効果的な活用方法についてアドバイスをを行う。	ICTサポート
※受講している講義でレポートを書くように言われたが、書き方が分からない。 ※卒業論文の執筆にあたって資料の引用が必要になったが、適切な引用方法について教えてください。 ※視野の広いレポートを書きたいので相談に乗ってほしい。	※利用者の目的や習熟度に応じ、また提出先の科目内容等に応じてレポートや論文の執筆方針の相談に応じる。 ※アカデミックライティングの基本的な方法についてアドバイスをを行う。	ライティング・サポート
※就活に書いたエントリーシートを添削してほしい。 ※効果的な自己PR文の書き方を教えてください。 ※クラブのOBに宛てて依頼文を書いているが、失礼が無いかどうかチェックしてほしい。	※学生生活全般にわたる文書一般について、基本的な作成方法をアドバイスするとともに簡単な添削依頼に応じる。	ライティング・サポート

このように学修相談員（コンシェルジュ）は、利用者の様々なニーズに応じて、その様々なアクティブ・ラーニングを支援するのが仕事となりますが、その際に必要な技能は実に多岐にわたります。「話し言葉の運用（オラリティ）に係る指導ができること」、「書き言葉の運用（ライティング）に係る指導ができること」、「話し言葉・書き言葉の運用に係る ICT 活用の指導ができること」の三点です。すべて上述した「話す・聞く、見る、調べる、読む、書く」といっ

た「言語活動等を通じた協働的な学び」の場面に必須となる指導です。

果たして、それほど多岐にわたる領域について、それぞれ豊かな技能と見識とをすべて兼ね備えておられる方は得られませんでした。もちろん領域ごと何人もの方に来ていただけるならば良いのですが、一方で予算的な問題もありますので叶いません。それでも来春の開館に向けて、これらの業務を担ってくださる方を雇用すべく採用人事に追われている毎日です。

その仕事に携わりながら思うことですが、最初からすべての領域に通じる方を求めるのではなく、ご着任いただいた後、ご本人が不安をお感じになる領域については、私たちの方で研修の機会をご提供すれば良いのではないかと考えるようになっていきます。となれば、例えば本学の大学院生さんをまずは雇用して、十分な研修の機会を保証しつつ「一緒に学んでいただく」ことができるなら、私たちコモンズの運営担当はもちろんのこと、働くことになった院生さんにとってもご自身のスキルアップとなるわけです。実は、そのこと自体が「アクティブ・ラーニング」だと言って良いのかも知れません。当面、利用者各位にはご不満も生じるかも知れませんが、本学全体のこととして少し長い目で見れば、それも良いことではないかと思うようになっていきます。



さて、ここでいよいよ「学校司書の教育力に期待する」という冒頭で触れた課題——この夏の「第40回 全国学校図書館研究大会神戸大会」で議論された課題に立ち戻ってくるわけです。再び申しますが、そのテーマとは「これからの〈学校図書館〉および〈学校司書〉は、どのように変わっていかなければならないか」ということであり、それをもっとポジティブに捉えるならば「〈学校図書館〉および〈学校司書〉が有する〈教育力〉に対する期待に、私たちはどのように応えていかなければならないか」ということでした。それは、私自身が一館長として「学校図書館」の運営に携わるようになって痛感していることでもありました。

もはや明らかなように、「アクティブ・ラーニング」と称して新しい教育方法が行われ、それに対応して「ラーニング・コモンズ」と呼ばれる新しい施設設備や機能が設けられても、結局のところ、学校図書館に関わっている私たち、

中でも私のような「肩書きだけの館長」ではなく、皆様のような「専門職としての学校司書」の方々が、そのお持ちの教育力を発揮してくださらない限り、「ラーニング・コモンズ」の円滑な運営などではしないし、まして充実した「アクティブ・ラーニング」の実践などできもしないということです。

西南学院図書館には今日現在 32 名の職員が勤務しており、そのうち 22 名が司書として日々の業務にあたっています。その職員たちに向けて、「肩書きだけ」はありますが「館長」としての私は、これまで申し述べたような問題意識から、ささやかな「エール」の意を込めて常々こう申しております。

——皆さんが持っていらっしゃる<①資料やデータを的確に探し出す技術>、<②最新のテクノロジーを使いこなす技能>、<③本と活字文化に関する深い見識>、<④相手に応じて説明を行い質問に答える言語運用力>、<⑤相手を問わず笑顔で接することのできる対人スキル>などなど、すべて皆さんが研鑽と実践の中で培ってこられた素晴らしい<教育力>そのものです。皆さん、もし館内で困り顔をした学生君を見かけたら、どうぞ私たち教員にご遠慮なく、<図書館情報学の専門家としての教育力>と<一人の社会人としての教育力>をぜひとも発揮してください。<学校司書>というお仕事は先生方と同じように、学生君たちと関わってこそ一段と輝くものかもしれません。皆さんの教育力に私は心から期待しております——。

皆様の日々のお仕事に心から敬意を表すると同時に、今申しましたような「エール」を本日ご清聴くださいました皆様方にもお届けいたします。本日はどうも有り難うございました。

## 【付言】

後日、以下のような「事後アンケート」の集計結果を頂戴したので、念のためそのまま掲載しておく\*10。

## 県 SLA 学校司書部会・高等学校司書研修会 2016 アンケート結果

	北九州	筑豊	福岡	筑後	不明	合計
提出数	13	5	24	17	1	60
出席者数	23	7	39	23		92
回収率	57	71	62	74		65

## ◆講演について；「新しい教育観と大学図書館に求められる機能」

	北九州	筑豊	福岡	筑後	不明	合計
良かった 満足 参考になった 興味深かった	13	5	23	17	1	59

## ◆具体的な記述等

- ・とても楽しく、あっという間に時間が過ぎた。
- ・時間が足りず、もう少しお話を聞きたかった。話の後半を次の機会にぜひ聞きたい。
- ・講義を聴いてみたくなった。
- ・西南の学生になり、先生の講義を受けたかった。(人生変わったかも)
- ・最新の大学の授業が体験できて楽しめた。
- ・「源氏物語絵巻」をあらためてじっくり見たくなった。
- ・古典文学についても興味深い話ですごく楽しめた。
- ・アクティブ・ラーニングの一例として、「源氏物語」への現代的なアプローチの仕方が参考になった。
- ・アクティブ・ラーニングの実践についてとてもわかりやすかった。
- ・アクティブ・ラーニングのイメージが描けた。
- ・大学の図書館が進化しているのがわかった。
- ・新しい図書館の「物語」が聞けたことも良かった。
- ・大学図書館の取り組みを知る機会はなかなかないのでとてもためになった。今までで一番良かった。
- ・来年度のリニューアルオープンが楽しみ。
- ・来年、福岡地区司書研修会で見学に行きたい。

- ・現代の大学生がうらやましい。
- ・とてもワクワクした。大学生になって利用したいと思った。
- ・新しさのレベルが違うと感じたが、高校図書館も参考になる考えはあるように思った。
- ・大学と高校の差がありすぎ。でも、よい図書館ができるといい影響があるかも。あってほしい。
- ・大学でもアクティブ・ラーニングが行われていることに驚いた。
- ・高校にもラーニング・コモンズは必要だと思うが、現実問題スペースは厳しい。
- ・アクティブゾーンとサイレントゾーンを使い分けることによって学びもより深まっていくだろうと感じた。
- ・生徒が利用しやすい環境を作っていくことも重要な役割だと思った。
- ・アクティブ・ラーニングに図書館が関わっていくためには資料だけではなくメディア環境の充実もやはり必要不可欠だと感じた。
- ・コモンズコンシェルジュのかわりに司書に仕事をさせるという考えを持たれているように感じた。司書の専門性を今以上に外部に発信していく必要があると思った。
- ・明日すぐに仕事に役立つというよりも私たちの仕事に対する姿勢、気持ちのあり方に刺激を受けた。
- ・司書の役割に広がりを感じた。特にアクティブ・ラーニングに関しては、もっと積極的に関わっていかねばいけないと感じた。
- ・「土地の力」…ヒントをもらった。
- ・学校図書館も変わっていく、変わっていかないといけないと思った。
- ・古田先生は図書館という場をとっても大切にしていらっしゃる方だと思った。
- ・何より先生が素敵なお方だった。
- ・素敵な講演に感謝。
- ・ぜひ新しい図書館を見学したい。(同じ意見が多数)

## 【注】

- \* 1) 2016年09月28日(水)14:30-16:00,福岡県立図書館に於いて行ったもの。当日の演題は「新しい教育観と大学図書館に求められる機能」だったが,今回,講演内容を文字化するにあたり,本旨に則って一部を改めた。また誤解を避けるために表現等の加除を行うと同時に,理解を進めるために補足的な記述を必要に応じて加えた。なお本旨に関わらない贅言の類はすべて省いた。
- \* 2) 矢野桂子さん(福岡県立福岡工業高校),許斐裕子さん(同 修猷館高校),前野琴子さん(同 城南高校),大寫こずえさん(同 福岡農業高校),田中孝子さん(福岡市立福岡女子高校),齊藤貴子さん(学校法人純真学園純真高校)
- \* 3) 星野陽子さん(福岡県立青豊高校),井上早紀さん(福岡県立三池工業高校)
- \* 4) 野田明美さん(福岡県立八幡高校)
- \* 5) 「西南学院大学2016年度オープンキャンパスにおける説明資料(本学図書情報課作成)」と「西南学院大学新図書館 基本設計案(2015年3月公表)」の二種。
- \* 6) 同会の発起人代表は河村建夫さん(学校図書館議員連盟会長,衆議院議員)。その他,赤堀侃司さん(一般社団法人日本教育情報化振興会会長),相賀昌宏さん(一般社団法人日本書籍出版協会理事),大滝則忠さん(国立国会図書館長),小峰紀雄さん(学校図書館整備推進会議議長),田中孝一さん(川村学園女子大学教授/元文部科学省主任視学官),銭谷真美さん(東京国立博物館館長・公益社団法人全国学校図書館協議会会長),肥田美代子さん(公益財団法人文字・活字文化推進機構理事),森茜さん(公益社団法人日本図書館協会理事)がお名前を連ねていらっしゃる。
- \* 7) 同会の具体的な活動に関しては,次の6項目の事柄が示されている。
1. 学校図書館の整備・充実を図るための活動
  2. 学校図書館の活性化に関する研究
  3. 研究会・研修会・フォーラム等の開催
  4. 学校図書館のPR活動
  5. 災害に見舞われた学校図書館に対する支援活動
  6. 学校図書館活性化のための他機関との連携
- \* 8) 四辻秀紀解説(2004)『日本名筆選 46 源氏物語絵巻 伝藤原伊房・寂蓮・飛鳥井雅経筆』(二玄社)
- \* 9) 加藤順子さんによる復元模写絵。徳川美術館・五島美術館監修(2005)『よみがえる源氏物語絵巻』(NHK 名古屋放送局ほか)に所収。
- \* 10) 野田明美さん(福岡県立八幡高校)からのメールによる。